

ふるさと歴史探訪

あやめ まえ 菖蒲の前伝説

寺崎久徳

備後守源三位入道頼政は、摂津源氏の始祖頼光から五代目の嫡流である。彼は源氏と平氏が勢いを競った時代の一流の武将であったが、「新古今和歌集」や「千載和歌集」などの勅撰和歌集に六十余首採録されているなど、当時の京都朝廷においては、武将としてより歌人としての評価が高かった。

そのためか保元の乱や平治の乱など、源平の勢力争いのなかにあつては、彼はいわゆる大半の源氏一族とは別に平家サイドの歩みをしており、平氏の世になつても源氏のなかでただ一人順調な官途をたどっている。治承四年（一一八〇）四月、後白河法皇の第二皇子で高倉宮と呼ばれていた以仁王の平氏討伐の檄文が諸国に発せられたことから、園城寺、延暦寺、興福寺の一部の大衆や京都周辺の武将などは、語らつて平氏打倒を企てた。

五月十五日、平氏討伐の謀議のあることを知つた平清盛は、以仁王の配流を決め、これを逮捕すべく、以仁王の住む高倉宮へ兵をさしむけた。ところが、これら清盛の動きをいち早く察知した頼政の行動は早かつた。頼政は、高倉宮に長兵衛尉長谷部信連一人を残したまま、以仁王を守護して京都から園城寺へ入っている。

ここらあたりのことは、「西備名区」によれば

治承四年庚子、備後守源三位入道頼政は、平家の暴悪を憎み、高倉宮に御謀叛をすすめ、平家を傾けんと謀りしこと顕れて、頼政、宮を守護して都を出つ。宮の御所には長谷部信連を残し置く。宮、御謀叛の旨平家は聞き、宮を取奉らんと檢非違使を向けける処に、宮は先達て落給ひ、御所には信連一人あり。檢非違使みたれ入れければ、信連散々に戦ひしかども終に生捕られ、獄に入る。平相国入道（清盛）、信連が勇敢をおしみ、誅をゆるして伯州（伯耆国・鳥取県）日野に流しける云々

とある。

そして清盛は五月二十一日にいたり、平宗盛を大将として平氏一門のおもだつた者を網羅した園城寺攻撃軍を出発させているが、なんとその先鋒には頼政を任命していることがおもしろい。清盛はよほど頼政を信頼していたものとみられる。

以仁王、頼政らはこの平氏の攻撃に耐えかねて、二十五日夜園城寺を脱出して南都に向かい、興福寺に頼らんとしたが、宇治平等院の付近で平氏の追跡軍三百余騎に追い付かれ、翌二十六日、以仁王、頼政ともどもに敗死した。以仁王は流れ矢でかくれ給い、頼政は一族とともに宇治平等院の観音堂の辺の「扇の芝」(現在扇型に植え込まれた芝生が残っている)で自害したという。頼政七十七才であった。

さてここで菖蒲の前の登場である。

菖蒲の前の出自については諸説がある。「西条町史」によれば、頼政とその家臣猪野隼太の二人が、内裏の紫辰殿の屋根上に夜毎くる怪物を射止めた功勞により、時の近衛天皇から菖蒲の前を賜ったとあり、また

「西備名区」によれば、菖蒲の前は「前中納官藤原為明卿の次女なり」とある。そして西条町の東子の滝では、菖蒲の前は頼政の息女、との記述もある。

菖蒲の前は頼政の自害を聞き、三歳になる鶴若丸(一説に種若丸)と家臣の猪野隼太を連れて宇治平等院の戦場跡を奪ねたところ、自害したといわれる「扇の芝」で、落ちていた頼政の扇を発見した。それには

埋もれ木の花咲くときもなかりけり

身のなり果てぞあわれなりけり

と辞世の句が書かれていたという。

菖蒲の前は、頼政の供養をする暇もなく、その足で平氏の追手を逃れて三人で西国へ落ちのびている。

なんとしても八百年余前の話である。そして歴史は勝者に対しては詳しく記述しているが、敗者に対しては常に薄情である。菖蒲の前に対してもあまり記録は残されていないが、その後菖蒲の前は、突如備後国の「草意地」の地に現われてくるのである。

だいたい源氏の勢力は東国であり、京より西は平氏の力の強いところである。伊豆で生まれたのかといわれる菖蒲の前が、どうして備後の地に逃れてきたのであろうか。この疑問に対して「西備名区」は次のように答えている。

是は其先、頼政備後の国司として下向ありしに、猪の早太を召連られ、任久かりしかは、智音深き人ありて、頼政上洛の後も怠らず参勤して、家人の如く仕えし何某なる人あり。それを頼りに備後に下り、草意地と云う処に暫く忍び居られける云々

この「草意地」とは今の福山市の草戸であり、「日本のボンベイ」と一躍有名になった「草戸千軒町」のことである。古史によれば、草戸は「草意地」「草市」「クサイツ」「草土」「草井地」とあり、芦田川は、「朝川」「潦川」と名前がでてくるが、ここでその周辺のむかしのことを簡単にまとめてみよう。

むかし、現在の福山市街地はもちろん、神辺平野から新市にかけては奥深くまで海であった。これを「吉備の穴海」という。「日本書紀」によると、ヤマトタケル命がいまの熊本県にあたる「くまそ」を征伐して帰る途中、武倍山（福山市宜山）に陣を敷き「吉備の穴海」の荒ぶる神を殺したと記されている。そこには「吉備穴国」と「吉備品治国」があり、おそらくそのいずれかの王が征伐されたのであろう。

その頃、この付近で最初に栄えたのは今の福山市津之郷町辺りであった。古代津之郷は津宇と呼ばれていたが、なんといつてもここからは紀元一四年から五十年の間に中国で鑄造されたという、王莽の貨泉（銭）が発見されている。すでにその頃からここには大きな集落や港があり、中国と大きく交流して繁栄していたことを物語っている。

その後は、芦田川から流失する土砂などにより地形が変わり、繁栄の中心は神島（現在の芦田川にかかる国道二号神島橋あたり）へ、さらにはその南の草戸千軒町遺跡周辺へと移っていったのに違いない。天平八年（七三六年）新羅に使用した阿部朝臣繼麿が

月よみの光をきよみ

神島の磯間の浦ゆ船出すわれは

と神島を詠んだ歌が残っているし、草戸千軒町遺跡西側にある草戸明王院は、大同二年（八〇七年）に弘法大師が開基したとの伝承もあり、国宝五重の塔には

「貞和四年（一三四八年）戊子十二月十八日九輪を上す」

と銘があり、

「一文勸進の小資を積み（住民が一文ずつ出し合って）五重塔婆の大功をなす」

と多くの善男善女の寄付で作った旨の札も納められている。

この草戸千軒町遺跡で、菖蒲の前は誰に庇護されながら、どんなかたじけなく暮らしていたのか。

そんなある日、突然にさきの長谷部信連がここに現われて、偶然にも猪野隼太と出会うのである。信連が云うのは、

「清盛により伯州日野に流されていたが、伊子の国に渡り、河野に、平家打倒の戦いを興すよう、説得するためにここを通りかかった」

というものであった。

「源平盛衰記」二六卷によれば、治承五年（一一八一）二月一七日、伊予国から六波羅に飛脚がついている。それによると

「伊予国住人河野通清が昨年冬に平家討伐の謀反をおこし、道前、道後の境の高縄の城に籠もった」

というものであるから、長谷部信連が草戸千軒町を通りかかって猪野隼太と出会ったのは、その前年の治承四年の秋頃ではなかっただろうか。さらに信連はここで猪野隼太らに対して

「ここは鞆の津に近い。鞆の津には平氏の武将が多く、久しくは忍びがたい」

として菖蒲の前主従三人を連れて北に走り、甲奴郡の上下に落ちてい

る。この地から上下までは約五〇キロというが、そのとき菖蒲の前は頼政の子を懐妊中であり、且つ三歳の若君をつれての逃避行であるため三、四日はかかったであろう。

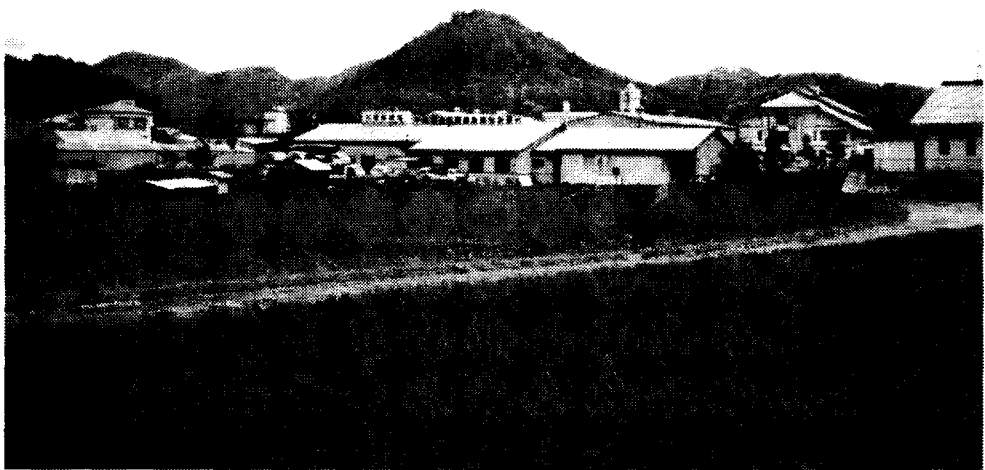
甲奴の名は、昔は「甲努」「加不乃」「甲怒」「カフヌ」などである。これは天武天皇の御子大野王の後裔にあたる「甲能」という人がこの地を領していたから、その名が地名になったといい、また上下とは元「城下」と称していた由である。

さて、菖蒲の前主従は、この上下付近のどこに忍んでいたのであろうか。これを探究するには、信連の足跡及びその子孫について追究していかなくてはならない。

平家が没し、源氏の世の中になった頃、文治元年（一一八五）土肥実平が備後守護職となり、田総郷有福庄（上下町有福）に入ってきたが、それ以後のことを「西備名区」でみると

土肥次郎（実平）、梶原平三中国の守護として下向につき、信連聞いて実平に通ず。実平是を扶助して後鎌倉に達しければ、信連備後矢野庄、伯州金持庄を賜り、翁山おきなやまにかまえし城に住しけり。その後（信連は）頼朝卿より召され鎌倉に入りければ（御家人となった）勇功のを継かんとて加州（加賀の国）にて数箇庄を賜り（中略）是より加州に住す。〔備後古城記〕によれば、知行三万五千石とみえる記述あり）

故に北国に信連の子孫あり。
備後にありける間、妻あつて一男子を生ず。関東でれるみぎり、いま



〔上下 翁山〕

に幼稚の者なればとて召具するに及ばず、家人に託して実平に預け置くける

とある。

その後信連は『東鑑』あづまがみによれば、建保六年（一二一八）二月二十七日能登国大屋庄で死んでいる。

幼少のため上下に残された信連の一男子は、その後無事成人して良連と名乗り、以後長谷部家は主として足利、大内及び毛利家の武将として十数代続き、末は長州に移り住んでいる。なかには豊臣家の石田三成の家臣として、江州佐和山城落城の時に石田三成と共に討死にした者もある。

これら信連の子孫のうち、上下地方で比較的によく名前が残っているのが五代目にあたる信吉と一三代目の元信である。

信吉は暦応三年（一三四〇年）上下村地頭職に任じられて護国山翁山城を築城しているし、元信は矢野荘の高鉢山城及び国富城（上下町国留）に住すなどの伝承が残っている。

話をもとにもどそう。

草意地から逃れた菖蒲の前主従は、この上下のいずれに忍んでいたのであろうか。

長谷部の名が比較的よく残っている矢野庄か、あるいはその頃（一一八五年頃）京都賀茂別当社領として大いに発展して、上下町のおく及ぶところではなく、その繁栄は四辺の近郷にとどろいたという有福荘だっ

たのか。

いずれにしても推定の域を出ないが、しかしこの上下の地も彼女たちにとって決して安住の地ではなかった。

平氏の者どもは、信連及び隼太らが忍んでいることを知って、上下に攻め寄せて来たのである。彼らは上下及び阿字山（府中市阿字町）に隠れ住んでいた平治の乱の源氏方の浪人数十人を語らい、翁山に籠もってこれを迎え撃っている。『西備名区』には

翁山というところに引籠もり、一揆と戦うこと久し、信連を大将として、戦い年を重ねたり

とある。

翁山は高さ五四七メートル、比高一五九メートルで、『広島県史』によれば、品遅国造居館の遺跡というが、翁の名は国造りの祖オキナガヒコ王の名に基づくといわれている。ここ数年来一二月になると、全山をクリスマスツリーで電飾することで一躍有名になった。

ここでその頃の備後地方の平氏の勢力を見てみよう。

その頃、甲山町、世羅町一帯の太田庄（約六百町歩といわれていた）は平重衡の所領であり、彼が預所職となっていたが、いまだ彼は十才前後の少年で、もちろん京に住んでいた。実際にここを支配していたのは開発領主の下司橋氏であり、そこに太田太郎光家と世良荘司兼隆なる二人の実力者がいた。

この二人は

「兼隆、光家等、武威を事に寄せ、私領の如し」

との記録が残っていたり、また二人ともに平家滅亡の地の壇ノ浦まで平氏と行動を共にしていたことなどを考えると、やはりある程度の武力、兵力は持っていたと思われる。

一方、福山の頼の津はその頃平氏水軍の一大根拠地であった。

ここに斐忠次郎という水軍の主がおり、彼から平重盛、教経、知盛などの武将が操船の術を習得しているし、また先に述べた伊予の河野通清の謀反に際しては、奴可入道西寂（比婆郡小奴可の亀石城主）が頼の津から数千艘の兵船をくりだして高縄の城攻めに参加しているなど、その頃の頼には相当数の平氏の集兵能力があったことがわかる。

おそらくこの頼の津と太田荘の平氏が、お互いにあい連絡して翁山城に攻め込んだものとおもえるが、この翁山合戦をめぐる記録はまったく残っていない。

だがしかし、それから元暦二年（一一八五年）三月の平家滅亡迄の間「信連、大将として、戦い年を重ねたり」

とあるほどだから、相当長期な翁山籠城合戦が続いたものと思われる。

その間詳らかではないが、菖蒲の前ら主従三人はこの争いをさけて上下を去り、西に走ってふたたび賀茂郡下原の地に落ちていくのである。

山陽本線西条駅から南へ広島大学に向けてしばらく走ると、右側に三ツ城古墳がある。後円部直径は約六二メートル、前方部先端中は約六七メートルあり、広島県下最大の五世紀後半に造られた前方後円墳であ

る。文化庁などの補助事業で付近の公園化が進み、平成六年春には古墳の完全復元化が完了した。

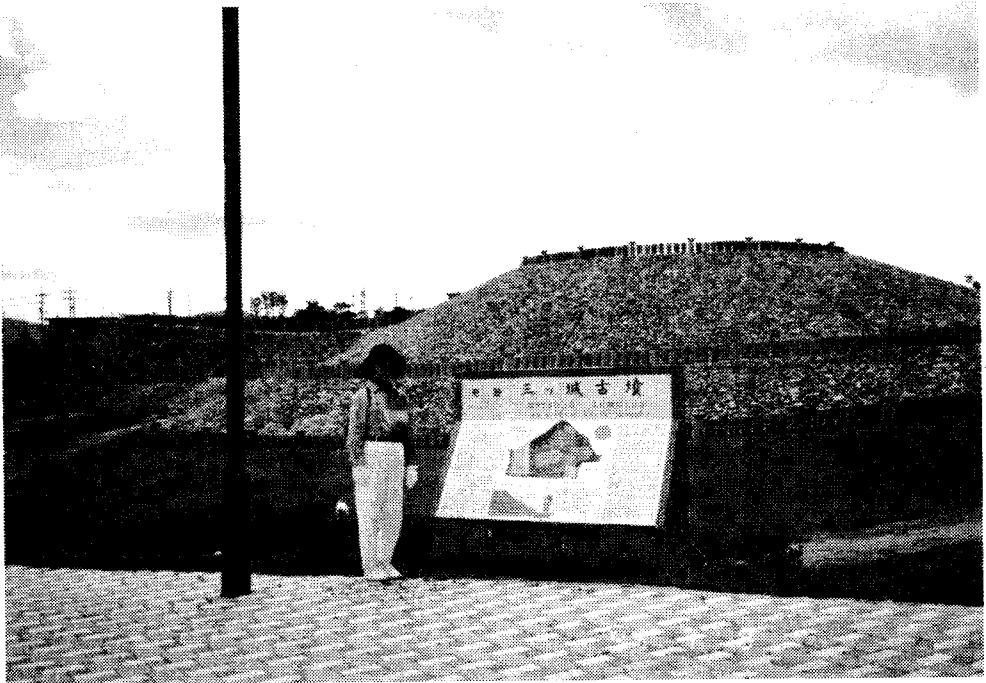
この古墳は三段の墳丘斜面を葺石が覆い、かつ周溝をめぐらせて総数一八五〇本にのぼる各種の埴輪が各段に並ぶなど、まことに立派である。そして特筆すべきは、この古墳の「造り出し」から出土した祭祀用の初期須恵器は、成分分析の結果から、大阪府堺市の官宮の陶邑の窯で焼かれていることが判明したことである。

それからみると、この古墳の被葬者は大和政権から派遣された安芸の国の首長だったのか、あるいは反対に、かつて強力だった吉備や出雲勢力に対抗する安芸勢力の主だったのか、これもまた大きな謎である。

閑話休題、この古墳から南東へ約三キロ余り、賀茂台地の一角を賀茂川（西条川の上流）が流れ、その末の一部は滝となって三永水源地にそそいでいる。これを「千尋の滝」という。「賀茂郡誌」には

御藪宇村と御田村の境にあり、比境怪岩環列して或いは獅子の怒るが如く、或いは猛虎の嘯く如く、風趣甚奇なり。西条川（黒瀬川の上流）の水、茲に來り、懸て瀑布を成す。拳大の小山を挟みて二水となり、左右に落つ。左を雄滝と稱し、右を雌滝とす。平常は雄滝のみ水あり、一旦雨を得ば雄雌の二瀑壯美を競ふ。高各三〇間、巾各一〇間あり、

と記されている。



〔東広島市 三ツ城古墳〕

菖蒲の前と猪野隼太らは平氏の追手をのがれて西下し、加茂郡下原の地に着いてまず最初にこの滝の岩屋にかくれ、平家方の詮議の目をそらせたという。

当時のこの地方の住民はほとんどが平家方で、源氏の落人をかばう人はいなかったというが、ここで彼女らはいったい誰の庇護をうけていたのだろうか。

話は後にそれるが、安芸の国に攻め入った源範頼は平氏討伐の後に行賞をおこなっているが、その中で山県郡の豪族の一人である山方(山県)為綱なる者が、「軍忠人に越えた」と賞せられたとの記録が残っている。

これに関連して一説によれば〔西条町誌〕

宇治に敗死した頼政の二男又二郎と菖蒲の前は安芸に来て、又二郎は山県郡に知行せられ、山県国政と称して猿喰城(八重町)を築城し、新四郎は東西条郷を知行せられて、水戸新四郎頼興と称し、下見に二神山を構築、菖蒲の前とともに在城した云々

との記録も存している。

よって山方(山県)為綱なる者と、この山県国政と称する者との関連は不明であるが、やはりこの山県につながるなにかの縁があって、菖蒲の前はこの地に落ちてきたのではなからうか。

さて話をもとにもどそう。

菖蒲の前がこの滝の岩屋にかくれていたとき、当時三歳だったとい

う鶴若丸は病死している。菖蒲の前はそれをいたく悲しみ、その霊を滝のほとりに葬った。これを「滝の観音」という。現在は六角堂が建ち、なかには隅飾が直角な高さ一メートル余りの宝篋印塔ほうきょういんとうが建てられており、一面に

元久年中（註、一二〇四―五年にあたり、年代からみてこれはおかしい）頼政公の息女（註、これもおかしい。室か妾である）菖蒲の前は、西国に下り下って当郡下原村滝の岩屋に來られ、旅の疲れを休めるうちに、若君種若丸俄に病氣になり、あえなく世を去る。菖蒲の前悲嘆にくれ、石を重ね墓のしるしとせられ、子を思う親の手向草として

吾妻子（東子）や、千尋の滝とあはれてた

広き野末の末をみるらむ

と詠じられ、是より世の人吾妻子（東子）の滝という。

とあり、更に一面に

今より七六二年前、源頼政公の息女菖蒲の前は、吾が子のために父頼政公の守本尊を七日の間勧進して追善供養を営む。是より世の人が種若丸の墓を滝の観音という。

旨の由来記が建っている。

その後菖蒲の前は、同所宮本谷の寿福寺に相当長く滞在していたらし

い。そしてここで男の子を生んでいる。幼にして豊丸、三戸源兵衛、長じては水戸新四郎頼興という。

その頃からこの賀茂台地は兵戦の巷と化してしまった。すなわち元暦元年（一一八四）七月、土肥実平らを先陣とする源氏の軍勢が平氏を追って、備後から安芸の国に侵入してくるが、安芸の武士達の抵抗はさまざま、源氏は六度戦って六度敗れている。

そして同年九月、範頼の出馬により源氏はやっと安芸の国に進駐することができたが、この戦いにより西条の国分寺はもとより、この地の主だった寺院は殆ど焼きつくされたという。

そして時はめぐり、元暦二年（一一八五）三月平家は壇ノ浦で滅亡し、世は源氏のものとなった。菖蒲の前によく日がさしてきたのである。しばらくは安堵の日々が続いたであろう。

その頃から菖蒲の前は仏門に入り、夫頼政及び吾が子鶴若丸の供養に精進している。いまの賀茂台地に観現寺（いまは観音堂になっている。頼政と菖蒲の前〔西妙尼〕の木像がある）、明現寺（菖蒲の前の棲所という）、鏡見寺など（いずれも廃寺）を建立したとの伝承が残っている。

その後建久三年（一一九二）源頼朝は征夷大将軍となり、菖蒲の前は頼朝より賀茂一郡を賜った。菖蒲の前はこれを「御園みやちの地であり、わが園である」とひどく喜び、それまでの下原の地をそれ以後は「御園みやち宇」と呼ぶことになったという。

あわせて水戸新四郎頼興は下見の二神山に一城を築き（二神山城、又の名を美津城みつという）、菖蒲の前とともにそれ以後はここに住んでいる。



「吾妻子の滝」

が、当時新四郎はどうみてもいまだ一〇才から一二才前後であり、この城はやはり母菖蒲の前の力で築城したとみるのが妥当ではなからうか。

その後は約一〇年余り平和な時が流れたようであるが、突如二神山城が落城するのである。これには実平の子土肥遠平に攻められたという説と、いや平家の残党だという説がある。わたしは前者をとりた。

元久元年（一二〇四）甲子八月四日二神山城は落城し、新四郎は東に逃げて今の広島カントリークラブ西条コースの辺にある福成寺にひそみ、菖蒲の前は反対に西に走っている。

今の原の自衛隊演習場と八本松の米軍弾薬庫にはさまれた原村曾場山の山中に池があるが、菖蒲の前らがここまで逃げたときに追手に追いつかれている。ここで新四郎付の侍女であった鶴姫なる者が、「われこそは菖蒲の前なり」と名乗って戦ったが及ばず、その池に入水して菖蒲の前を逃がしたために、それ以後はこの池を「姫が池」と呼ぶようになった。

またその付近には、鶴姫の菩提を弔うために菖蒲の前が般若経を讀み、それを埋めたという経納塚も残っている。そして菖蒲の前はさらに北に走って原村長沢の小倉山にひそみ、髪をおろして西妙と名乗ったが、人々はこれを水戸の尼と呼んだ。この地は賀茂台地を一望できる標高三八〇メートルの山腹にあるが、ここで西妙は同月二日入定し、二七日絶命している。年齢は詳らかでない。

いまその地に小倉神社がある。社碑には

当社は源頼政の室菖蒲の前を祀る。御誓いあらたかに五穀成就、民安

全の守護神なり。わけて旱天に雨を祈るに應驗著し。

治承三年（一一七九）源頼政宇治平等院に討死し、菖蒲の前のがれて芸州下原村にひそみ、やがて後鳥羽院より加茂郡一円を賜り二神城を築く。賊徒城を攻めるやまたのがれ、ついに元久二年（一二〇四）八月二十七日この小倉大谷に入定す。

生地小倉の里（京都）にちなみ愛せしところ所領西条郷を一望する風光絶佳の地なり。

とあり、また

小倉山茂る宮居となるならば

民の竈をわれぞ守らん

定めなき世をうきこととみかぎりて

菩提の道にいるそうれしき

住みはつる世を秋風の身となれば

さゆる間もまつ山陰のしも

などの句が残っている。

この小倉神社から約五〇メートル離れた山中が西妙尼の入定の地とされているが、ここに宝篋印塔を祀った御堂があり、それを囲んで数十の墓が残っている。同所の墓碑には

菖蒲の前、元久元年（一二〇四年）八月二十一日この地の土洞に入り、

父母の形見の笛を吹き続け、二十七日暁入定し給う。

家臣、後を追ひ死す。その墓、周辺に現存するもの三十教基あり。

とある。

さらに西妙尼の菩提所として円福寺が残っている。ここには

鳳瑞院殿菖蒲前二位西妙尼大姉

の位牌がある。寺伝によれば、かつては瑞鳳山小倉寺と称して二二坊あり、寺領として方三千歩の地、及び山二万歩を有していたとのことである。

水戸新四郎頼興には、姉蘭菊、弟豊之丞という二人の子供がおり、姉は成人して猪野隼太の子彦九郎の妻となったという。

また猪野隼太はその後勝屋右京と改名したが、建保四年（一二二七）

丙子七月八日に八四歳で没していることが判っているが、それ以外には水戸新四郎頼興をはじめ他の人達についても記録はまったく残っておらず、いつさい不明である。

追記

この原稿を書いたのは平成七年八月である。

その後「西条町誌」に

「頼政の次男又二郎と菖蒲の前は安芸に来て又二郎は山県郡に知行せら

れ、山県国政と称して猿喰城を築城した」

【東鑑】に

「山方為綱なる者は、源範頼から「軍忠人に越えた」と賞せられた」

云々とあることから、この山県国政と山方為綱なる人物がどうも氣に掛かり、調べたところ次のことが判明した。

- ① 山県国政は頼政の従兄弟にあたり、美濃国山懸郡に居住していた。
- ② 治承の乱平定後、平清盛は諸国の源氏の再挙を恐れて、諸源の掃討を行なっているが、それにより安芸の国に配流されている。
- ③ この国政は一時頼政に養われて子となり、菖蒲の前を母として仕えていた。
- ④ 国政の四男山県為綱をはじめ、山県氏は代々地頭職として現在の山県郡千代田町壬生の壬生城を居城としていた。
- ⑤ 為綱から一〇代目の元照が毛利興元に属した。
- ⑥ 更に一三代目の時玄の時長門の国萩城下に移り、彼は軍学指南にあたり、
っている。
- ⑦ その後子孫は次第に微禄となり、しまいには五人扶持の卒族とまでな
った。
- ⑧ 天保九年閏四月二二日を綱から二三代目として一男子が誕生している
が、彼が後の明治維新の元勳陸軍元帥大勲位公爵内閣総理大臣山県有
朋である。